叅同契講話

249
213

249-213
1200701781954

叅同契講話

秋野孝道述

赤星陸治筆受

東京

丙午出版社發行

序

曩に、三菱禪話會で、碧巖集の講話を秋野老師から全部聽かして頂きました。それが八年間かゝりましたが、私は拙い筆で順に筆記いたしました、その原稿を老師の『碧巖集講話』として刊行いたしました。

今回は餘り長くかゝらないものがよからうとの仰せで、結局、參同契と寶鏡三昧とを拜聽することになりました。

この兩書は短いものでありますが、佛法の眞意が充分に含蓄されて、禪に參ずる人には大切な好い禪文字

だと承つて居ります。昭和二年七月二十日がその第一回の開講でありましたが、それから六回續講していただき、昭和三年五月二十一日に完講になりました。

例に依つて私がこれを筆受して原稿をまとめて老師の嚴密な御斧正を願つた上で、又これを刊行することにしたのであります。

禪は參ずべきものであるといふ立場からいへば、かうしたことは却つて玉に疵をつけるやうな感じもいたしますが、この有難い法筵に列ることが出來ぬ人で、しかも法益を得たいと希望する人の一粲に供することにもならうかと考へるからであります。

老師の御講話には飾りがなくて、しかも親切がこもつて居る。さうしてその一話一言が、その御人格から發露して參りますために、聽いて居りますと、いかにも心持よく、いかにも有難い感じがいたします。

しかし、これを筆受する私の筆が甚だ拙いために、その間の消息を充分現すことが出來ぬのは如何にも遺憾に存じて居ります。が、内容は丁寧な老師の御校閲を經て居ることであるから、宗意の上に書き損じのないことは保證が出來ます。

老師は昨年を以つて古稀に達せられて居ります。この春に鶴見の總持寺で古稀記念講演會がありました。私共はもう已に十幾年間といふ長い間、御提撕を受けて居ることを如何にも難値難遇のことゝ考へて居ります。老師のます〳〵福壽增長ならんことを祈る次第です。

御講話をしていたゞいた上に、更に校正の御骨折りまでかけて、老師に對しては何とも御詫のしやうがない位です、それに老師の門人の安藤文英師が碧巖集講話刊行の時と同じやうに、本書刊行に對しても何くれとなく御心配下さつたことは、何時もながら感謝に堪えない次第であります。

昭和三年十月

莫作庵　赤星陸治識す

參同契講話

秋野孝道老師述
赤星陸治筆錄

序說

當倶樂部の禪話會は、碧巖の講了を一と切りとして暫く休講になつて居りましたが、又皆さんから話があつて、今回再び講話をすることになりました。

先年講話しました碧巖のやうな永いものは、完講までに永い時間をとることでありますから、今回は短いものが宜しからうと思ひまして取り敢えず今日より參同契と寶鏡三昧とを講ずることに致しました。此の參同契と寶鏡三昧との兩書に就きましては、古人の注釋した書物が澤山あります。指月和尚の不能語あり、面山和尚の吹唱があり、天桂和尚の報恩篇があり、元賢和尚の洞上古轍があり、千丈和尚の

杓ト編がある、少々づゝ見方の違ふ處もあります。今回衲（わたくし）の講話は多く吹唱に依つて致します。さうして本文の一通りが解ればよいとして講ずるのであります。委しいことは古人の注解に就いて研究してもらひたいのである。

この參同契と云ふ文字は、仙人の書物の名前であります。支那の仙術家に魏伯陽と云ふ人がありますこの人の書物に參同契と云ふのがあります。御承知の通り仙術と云ふものは多く自然の道理を説いたものであります。仙術は彼の老子莊子の自然見の道理を説いて、三世因果の道理を説いては居りません。この魏伯陽の書いた參同契の道理は天地自然の理が書いてあります。ところが佛敎に於ては、自然の道理は説きません。從つて書物の名前は同じであるけれども内容は大に違ふて居ります。石頭大師は唯だ參同契と云ふ名前の文字を借りたまでのことである。

佛敎では因緣と云ふことを説いて自然と云ふ道理は説きません。自然の見より見ると天も自然である。地も自然である。人間も自然である。利巧の人も自然である、愚鈍の人も自然であると云ふ。金持の人も貧乏人も皆是れ自然の道理であると云ふことになる。佛敎では因緣業成と説きます、天地と云ふ方は依報にして、人と云ふ方は正報であります。皆過去の善と惡との業力業報に依つて同じ人間界に生じても貧乏の人もあれば富貴の人もある。總て因緣に隨つて起ると説くのであります。金持に生れるには金持に生れるだけの因緣業力に依つてるのである。茄子の種を蒔けばその種の通りに相違なく生えるのである、一切の物は皆因緣に隨つて現はれてくるのである。

今此の春も十一月の冬至の時、彼の寒林の中に一陽來復の芽の兆がある。窮して は通ずる道理で、春の期節が來れば自然と春暖の氣節となるのである、春暖は冬至の時に含んで居る、物事は成るの日に成るにあらずして必ず由て來るところがある。土用最中に秋風が吹くと云ふも同じことである。斯くの如く、佛敎では總て緣起と云ふことを説く。人類でも動物でも植物でも皆緣起の力に依て現はれた物である。その緣起に依て出來たものは皆是れ無性と説く、今衲の身體でも原始（もと）の昔を尋ぬれば前世の業因である。それが父母の緣を借りて生れてきたのである。諸君の身體も亦さうである。今居る處の此の家屋も、今持つて居る扇子も、すべて緣起生の物である。この家屋を造るには御承知の通り第一が資金である、けれども金錢ばかり

では出來るものではない、技師も必要なれば、働く者も必要である、それのみならず、鐵材も入るし石材も入る、煉瓦も瓦も必要である、此の家屋なるものは種々なる因緣の集合體であつて、誠にこのまゝそつくり緣起の當相といふてよい。

緣起によつて出來た物は皆無性と說く、無性にして自性はない、この家屋にも家屋といふ自性はない。畢竟見來れば世界はみな因緣和合の集合體であるといへる。「引き寄せて結べば柴の庵なり、解くれば元の野原なりけり」である。家屋に自性なきが如く、我々の身體も亦燒けば灰となり埋めば土となる。然るに因緣合成の力に依つて今斯うして話をして居る、けれども散じ去つて後に無性となるのではない、高く聳えたる不二山の姿も緣起の物にしてありの儘の無性の姿である。萬物の當相は皆緣起の物にあらざるはない。而して緣起の物は皆是れ無性である。この緣起、無性の所說が佛敎の眞の說き方である。

前に述べたるが如く、參同契と云ふ名前は仙書と同じであるけれども、仙書の參同契と今示すところの石頭大師の參同契とは、名は同くして內容は全く違ふている、所謂換骨してあるのである。

この參同契を作くられたる人は石頭大師である。支那の皇帝より無際大師と云ふ大師號を賜つた人である。名は石頭希遷と云ふ、此人は支那の石頭城と云ふに庵を結んで坐禪ばかりして居られた人であるから。其當時の人々が石頭和尙と呼んだとある。大師は大鑑慧能禪師の孫弟子である。其慧能禪師は達祖より六人目の祖師なるがゆゑに六祖と云ふ、支那にては六祖の頃から禪宗が盛んになつたのである。石頭大師は本當は六祖の會下にあつて出家をせられた人であります、六祖遷化の時に六祖に向つて遷化の後何人に師事せんと尋ぬると、六祖が「尋思し去れ」と云はれた。其の尋思し去と云ふことを、坐禪のことと思ひ、初めは坐禪を專らにせられた。然るに尋思し去れと云ふことは、「青原行思を尋ねよ」と云ふことであつた。それから青原に參じて以て機緣熟して法を青原に嗣がれたのである。

石頭大師は何處で悟られたのであるか、古人方が悟る上に於ての因緣は皆別々である。水を涉て悟つた人もあり、擊竹一聲の下に悟つた人もあり、桃花の開くのを見て悟つた人もある。今此の石頭大師は肇論を見て悟られた。其の肇論を作くられた人は羅什門下の四哲の一人といはれる僧肇法師である、この人が書かれたのだ

からこれを肇論と云ふて居る。支那の姚秦時代に羅什三藏と云ふ人があります。此の人は新譯家の玄奘三藏と相對して舊譯家の羅什三藏として佛敎史上有名な人物であります。その弟子の四哲の中の一人にして僧肇法師と云ふ人があります。此の人は秦王の難に會ふて將に首を斬られんとする時、七日の間猶豫を乞ふて肇論を書いたとある。書き了つて首を斬られる所に至り、其頭を白刃に委した、時に「四大元無主、五蘊本來空、將頭臨白刃、猶如斬春風」といふ偈を作られた。佛敎では我々の身體は四大と五蘊との積聚だと說く。四大と云ふは地水火風の四つであります。五蘊と云ふのは色受想行識の五つである。四大に於ても四大に又四大の主はありません、五蘊に於ても亦是れ皆空なるものである。四大元無主五蘊本來空であるから、今頭を斬らるるとも痛くもなく又搔ゆくもない。猶ほ春風を斬るが如くだと、泰然として斬に處せられたとある。

その肇論の中の語に「會萬物爲己者夫唯聖人乎」と云ふ句がある。石頭和尙は此一句に依つて豁然として悟られたとある。悟つて見れば天地と我とが一枚にして物我一如である、徹底的に悟つて見れば天地と我と同根にして萬物と我とは一體で

ある、眞個に一體となれば則ち同根とか一體とかと云ふも早や已に第二第三である、石頭は此の句を見て悟つた時に「聖人に己れなし、己れならざるは無し」と云ふた。此の言葉は實に親切なる言葉である。小自己を離れて見れば全自己となるのである、自己と云ふものがあるから廣き世界に締切りが出來るのである、小自己の己れを離れて見ると天地は皆是れ己れならざるはない、天地が全自己の心境となるのである。

石頭大師は肇論を見て悟られたけれども、敢て肇論を眞似て參同契を書いたのではない、悟つた因緣は肇論であるけれども、肇論には用事はない、肇論には文學の臭味があると思ふ、石頭大師の參同契には文學らしい臭味を離れて活佛法が說かれて居る。

この參同契は一口に云へば佛敎の大意を示して居ると云ふてもよい。禪家の人は此の參同契は唯禪一派の大意を伸べたるものと思ふて居るが、實は廣く佛敎の大意たる緣起無性の道理を說いてあるのである。佛敎の道理を今一口に云へば「萬法一如、緣起無性」であります。この外に佛敎の道理は無いと思ふ、涅槃經の中には「佛

性は無性を以て性となす」とある、參同契も萬法一如緣起無性の道理が說かれたのである、今この萬有界の森羅萬象は皆是れ一如である、一如と云ふのは萬法は皆一に歸するからである。如何となれば凡ゆる物は皆佛性の緣起であつて、森羅萬象として一切の物に現れて居るのである、其の現はれたる一切の物は皆佛性である。それであるから萬法一如と云ふのである。佛性と云ふ物は形相はない、形相がないからと云ふて無いものではない、縱し其の形は見えなくとも佛性は無いとは云はれぬ、必ず實在のものである、それ故に佛性は無性を以て性となすと云ふ。萬法とは種々なる差別の方面から云ふのだ、今是れを迷悟の上から云ふと、迷は六道の方にして悟は四聖の方である、六道は迷の方にして四聖は悟りの方である。六道と云ふのは地獄と餓鬼と畜生と修羅と人間と天上とである。この六道は皆是れ迷の分際である。四聖と云ふは聲聞と緣覺と菩薩と佛とである。この六道と四聖との二つを合せたる世界、是れを十界とは云ふのである。さて此の十界は何が緣起したものかと云へば、謂ゆる一心の緣起であります。又は佛性の緣起したる物と云ふてもよい。地獄に於ても種々なる地獄があるけれども、其內極苦の地獄は八寒八熱等である、彼

の大震火災の如きは此の十通りの世界が一時に現出したかと思はれた位である、貴賤貧富無階級となり、飢の爲に弱肉强食、玄米結びを爭ふが如きは實に是れ畜生道である。鬪爭の心を起し、强い者勝ちなるは修羅道である。食ふ事も飲む事も十分出來ずして飢渴の心を生じたるは餓鬼道である。人間は半苦半樂と云ふから彼の大震火災の時に山手の方に住んで居る人と下町の方に住んで居る人とは實に半苦半樂の有樣だと思ふ、人間は苦樂の間に一生を過して居る。又天上界の人は衣食住の上に於て不足なく何んでも思ふ通りになると云ふ、しかし上界の人でも果報が盡きれば又地獄に墮ちるとある。立派な天上界の生活をして居る財產家でも、立派なる貴族の人でも銀行騷ぎの如く一つ間違へば那落の底に落る樣な事が到來するのである。此頃の新聞を見ると隨分立派な人が地獄へ墮るのがある。是等は皆上界の果報の盡きた有樣である、是等六道の迷の世界は皆一心の緣起である。

次に四聖とは聲聞と緣覺と菩薩と佛とである。聲聞、緣覺は二乘聲聞である、聲聞の人は自分さへ悟つて安樂になれば他人はどうでもよい、唯自分さへよければよいと思ふ心である。此の聲聞根性の人は今日却々多いと思ふ、彼の震災當時あの災

害の中にも隨分あつたやうに思ふ、彼の震災當時各地方より救助米とか、其他蒲團や毛布など澤山送り來るところの慈善心は卽ち是れ菩薩界である。菩薩は大心にして利他行の人である。恐れおほくも一天萬乘の仁慈深き大御心は乃ち是れ自他圓滿なる御聖德である、是れ卽ち佛界のありさまである。佛は是れ自覺覺他覺行圓滿の境界、是れを佛界と云ふのである。上に說き來る十通りの世界は要するところ心の變相である。十界は是れ卽ち一心の緣起である。十界差別の萬法は皆是れ一心の緣起なのであるから、萬法は一如である。緣起にも種々なる緣起の法があるけれども、緣起の法は佛法の大意である。

それで魏伯陽の書いた參同契は何んの書物に出て居るかと申すと、『漢魏叢書』と云ふが全百卷ある、其中に載せてあるのである。

先にも話した通り、參同契と云ふ文字は非常に好い文字である、今石頭大師も此の參同契と云ふ名前をこゝに假りて換骨して以つて佛法の上の參同契を說示されたのである。

參同契

此の參同契と云ふ文字の道理は如何なる意味を現はして居るかと申しますと。參は三なりとありて、數字のことで、差別の意味を現して居る、又同と云ふ字は、同一の義にして無差別の意味である、畢竟ずるに差別と無差別とが圓融通契して居る道理を示されたものである。參は同に契ふて參忘じ、同は參に契ふて同忘じ、參忘じ同忘ずる時、何んの契ふと云ふことかこれあらん、是れを眞の參同契と云ふのである。

石頭大師以前、華嚴會上に於て參同契の旨は既に說示されて居るのであります。華嚴には「心、佛、及び衆生の是の三は無差別なり」と說いてある、何事でも極意の眞實の處に行くと說く事は出來ぬのである。古人の語にも「從來の妙唱は舌に與からず」とある。いくら說いてもこゝに說かれぬ物がある。この微妙の法は說かれるものではない。

彼の文殊と維摩との相見の處に於いて入不二の法門についての問答がある、そ

の時維摩は默然せられた、維摩の默然は燒物の金着ではない、燒物の金着は口は開かぬと云ふが、今維摩の默然は雷の如く響いて居る、是れ乃ち從來の妙唱は舌に與からぬ端的である。眞實の是の端的の處は默然より外はあるまい。參同契の眞意は文字の外にある、其の假りの文字に捕らはれてはならぬ。要するに參同契と云ふは、前にも云ふ通り參は三なりで差別のこと、同は同一にして無差別のこと、其の差別と無差別とが回互したる圓融無礙の當體を契と云ふのである。この差別と無差別とが圓融無礙に融契する處に差別にも無差別にも墮ちない眞理が顯はれて居る。眞の參同契は文字に著かずして響を聽いて取らねばならぬ、この參同契の大意を合點して見れば、政治の上に於ても、敎育の上に於ても、實業の上に於ても應用自在である。實は釋尊四十九年の說法も是の參同契の敷衍であると言つていい。この扇子一本の上にも參同契の道理はちやんと具足して居る、竹と紙と要との上からは差別である。一本の扇子といふ上から言へば無差別である。參とするか、同契である、同契とするか、參である、是の扇子は竹と紙と要との三の集合體である。三とするか、扇子の上から言へば一本である。一とすれば三である。三とすれば一である。これ華

嚴會上の心佛及衆生是三無差別の道理に外ならぬのである。森羅萬象一物として參同契の道理に漏れた物はない、石頭大師は九十一歲にて遷化せられて居る。隨分長命の方であつた。

本文講話

竺土大仙心、東西密相附。

【讀方】竺土大仙の心、東西密に相ひ附す。

竺土大仙の心、竺土は天竺の國土である、卽ち印度である。大仙といふのは佛のことだ。首楞嚴經には十通りの仙の事が說いてある、其の中に佛の事を大仙と云ふとある。佛は不生不滅の涅槃の境界を得られた方であるからである。全體、仙人は不老不死と云ふけれども、こゝに四人の仙人のことがある。死ぬ時が來たら四人共に皆な死んだと云ふことがある、佛の法身は不生不滅である、遺敎經には「轉展して之を行ぜは如來の法身常に在して滅せず」とある。それであるから、いま佛のことを大仙と云ふたのであつて。竺土大仙の心と云ふのは印度の佛の心と云ふことである、そ

の佛心が、東西密に相ひ附すとある。この大仙の心を第一代の迦葉から阿難、阿難から商那和修と轉展相續して二十八代目が達磨大師である。東西とは東土西天の祖師方が代々相續して今納に至つて八十三代目である、だから密に附すと云ふた。密とは親密のことであつて秘密のことではない。師匠の心と弟子の心とが全く一つになり、誠に以心傳心の消息であつて、謂ゆる密室風を通せざるの端的である、この樣子を親密とは云ふのである。東西と云ふたとて何も東土西天といふ、印度支那ばかりを云ふたのではない、東西南北の人、一人として竺土大仙の心を有つて居らぬものはあるまい。東洋の人でも西洋の人でもみな有つて居る、さうしてそれが人類ばかりの話ではない、動物でも植物でも皆な佛の心を持つて居るのである。弘法大師の哲學は六大周遍である。六大とは地、水、火、風、空、識である、世界はみな六大周遍の現れである、草木の如きも日光の當る方へ木の枝が榮えてゆく、肥料のある方へ自ら根が張るのは竹木に至るまで識があるからである、大仙の心は周遍法界であるから親密である。心心一枚であるから密室風を通せずと云ふ、世間では親子ほど親密のものはないと云ふが、親子の親密も此頃は當てにはならぬ、親子で法廷に出

て原告となり被告となつて、立派な人たちが現に親子で法廷で爭つて居る。之れでは本當の親密とは云はれまい、青年同志が親密だの、知音だの云ふのも當てにはならぬ、茶屋か宿屋でゞも酒を飲む時は親密のやうだが、いざ勘定の段となると爭ふて喧嘩を始める、それでは本當の親密とは云はれまい、佛法の親密は心と心とが一枚になるを云ふ、一枚の上には爭ひはない、古語にも人々具足個々圓成とある、此の大仙の心を持たぬものはない、東西南北の區別なく人々具足の物である、一切衆生悉有佛性だからみな釋尊にもなれるし、祖師にもなれる、今はたゞ修行しないから成られないのである。

人根有二利鈍一、道無二南北一祖。

【讀方】人根に利鈍あり、道に南北の祖無し。

さて人間の根性は千差萬別である、これは前世の業力に依つて自ら招くところである、そこで人根に利鈍あり。人間の根機には利鈍の別があります。利口な人もあれば、愚かな者もある。筍や一度に出ても長か短か、同じ籔に出ても長い筍もあれば

短い筍もある、人間には、上智下愚、利人鈍者の差別がある。貧乏の者もあり、金持ちの者もある、色々である、人根の上には差別があるけれども、道に南北の祖なし、道の上には南北の祖なしで、道の上から見來れば平等である、南北の祖と云ふのはさきほど話しました通り、五祖下に慧能と神秀との二禪師があつて、それから南北の爭が生じたのである。石頭大師の時分には既に南北の爭が生じて居たのである。南は慧能禪師の方で、北は神秀上座の方である。二禪師は誠に禪門の雙璧である、しかし學問としては神秀が優れて居たが、修行としては慧能の方が秀でゝ居つた、從つて五祖の法を嗣いだのは、學問の優れた神秀でなくて、德の高い慧能の方が續いだのである。神秀の法は今日は絶えて居るけれども、慧能の法は今日も猶益々榮えて居る、學問には限りがあると思ふ、德には限りがない。その證據には目黑に行つて見ると能く分る、同じく德川時代に名高き二人の傑僧があつた、一は祐天僧正にして一は普寂律師である。普寂律師は長泉寺に住した人でその當時の大學者であつた。祐天僧正はその當時の信仰家にして德者であつた、今日でも目黑に行つてみると祐天僧正を知らないものはない、其の德の高い人であつたからである。今日までも其

名が傳つて居る。しかるに普寂律師を尋ねても知る人は殆んどない、祐天僧正の名前は子供までも知つて居る、德には限りがないと思ふ。學問の力には限りがあると思ふ。德を積んだものは何時までも榮えるが、學問の力や權力の人には限りがある、德の人は長く榮え力の人には限りがあることは古今の歷史が明かに證明して居る、慧能の法脈は今日も尙ほ盛んである、五祖會下に於いて慧能と神秀とが法を嗣ぐ時の偈が有名である。慧能の方のは「菩提元無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、」神秀の方のは「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃、」昔からこの兩偈については彼れ此れ優劣が論じられて居るけれども、孰は何れも優劣は無いと思ふ、なぜならば利根にして頓機の人には慧能の方の偈が利益があるし、鈍根にして漸機の人の爲には神秀の偈の方が利益があるのである。要するに機根の上には優劣があつても法の上には優劣はないと思ふ、機根の上に於いての利鈍あるが故に優劣はつけられぬ。このやうに南北の爭は慧能、神秀の頃より幾分萠芽をきざしていたのである、而し道の上から云ふときは上智下愚を論せず、利人鈍者を揀ばす、南北等の區別はないのである。この祖の字は本に依ては阻の字にしてある本もある。

靈源明皎潔。支派暗流注。

【讀方】靈源明に皎潔たり、支派暗に流注す。

靈源明に皎潔たり。靈源とは、靈は靈妙不思議のことで、思慮分別を以つて計られぬところを靈といふ。源は水の原である、水の源は奇麗に澄みきつて、清淨潔白なるものである、其の靈源が段々と末に流れて行くと支派暗に流注す。いろいろなる支派に分れて、終には濁つて來るのである。靈源は竺土大仙の心であつて皎潔である。靈源皎潔の心は人々生れながらに皆持つて居る、それが見る上に聞く上に付いて迷を起して居る。六根が六塵に對して次第に迷ひを生じて段々と濁りに濁りを重ねて來るのである、其皎潔たる佛性も暗に流注識の煩惱となる、迷へば衆生となり、悟れば佛となる。お經の中にも生佛不二とある、靈源と支派とは元來は一つである、靈源は支派を離れず、支派は靈源を離れては居らぬ。丁度澁柿と甘柿のやうなものだ、澁柿は支派にして甘柿は靈源である。澁柿そつくりそのまゝ甘柿となることが出來る。澁柿の外に甘柿があるではない、衆生は澁柿にして佛は甘柿である、迷と云

ふ澁さえ除ればそのまゝそつくり甘柿となる、煩惱卽菩提である。衆生が佛に成るのである。草は田畑の害となるものであるけれども、草の生えるやうな田畑でないと物實はとれぬ、「田の草を除つてそのまゝ肥しかな」、煩惱卽菩提の道理である。

衲は本年古稀になりました、衲は六つの歳に出家したから、古稀の詩に、

六歳辭親頓出塵。又迎七十夢中春。東傳祖道誰相續。悟了今人卽古人。

といふを作りました。東傳と云ふのは道元禪師に「西來の祖道我れ東に傳ふ」と云ふ偈があります。故に東傳の祖道と伸べました。悟了今人卽古人で、今日の人でも悟れば古人と同じである。古人でも悟らなければ今人と同じである。佛も悟らざれば凡夫である。今日の凡夫でも悟り了れば佛である。人類は申すに及ばず動物でも植物でも同一佛性なることを悟れば一本の木の枝でも無意味に折られるものではない。加賀の千代の句に、「朝顏に釣瓶とられて貰ひ水」とある、能く同情の心を伸べて居る。禽獸魚鳥を見るにも同情の心がなければならぬ。況んや人間同士においてをやだ、差別根性を以つて接するのは一佛性の道理に徹底しないからである。六祖大師は「一心一切法、一切法一心」と說示して居られる、一心は靈源にして一切法は支派で

ある。一心は一切法を離れぬ、一切法は一心を離れぬ、靈源は支派を離れず、支派は靈源を離れぬ。能く能く參じて見るがよい。（昭和二年七月二十日三菱倶樂部禪話會に於て）

執事元是迷、契理亦非悟。

【讀方】事を執するも元これ迷ひ、理に契ふも亦悟にあらず。

禪は元來學問ではない。古から講ずべきものでなく參ずべきものであると云ふ、卽ち師家に參じて實參實究するのが肝要である、道元禪師も「身心を決著するに兩般あり參師問法と工夫坐禪となり」と示されてある。只道理や理屈を聽いたばかりでは得ることは出來ません、然し道理や理屈も大切ではあるが、道理や理屈斗りでは落ち着きが惡い。先きにも伸べた通り禪は理屈一片ではゆかぬ、禪は文字意外に響きを聽いてとらねばならぬ、言葉にも述べられないものがある、文字にも書き現はすことの出來ないものがある、それであるから依文解義では其の本旨は會得せられるものではない、這箇の端的は自分自心の修行の力である、水を呑んで冷暖自知するより外に道はない、其修行と云ふことは吾が宗門では坐禪のことをいふのである、妙なもので、論より證據、修行を專一にせられた人は響きを聞きとることが出來ますが學問だけでは其の響を聽いてとることが出來ません、學問と云ふものは理屈は能く分るけれど肝要なる響きを聽いてとられないから落ち著きがない。鐵漢となるには坐禪修行の力によらねばならぬのである。また一面には言葉を以つて表すことの出來ないものを言葉を以つて表はし、文字に書き表はすことの出來ないものを文字を以つて表はすのである。謂ゆる有言語を以て無言語の道理を顯し、有文字を以て無文字の道理を顯はすのである。

さて本文に事を執するも元是れ迷ひとある、この事と云ふのは事相であつて差別のことになる、執すると云ふは執着にして、たゞ事相にのみ取りつきて偏執するのである、偏へに事相にのみ執着するので、詰り事の差別にのみに執着して無差別の道理が缺けて居る、唯一方にのみ偏するから迷ひとなる、世の中と云ふものは事の裏には必ず理がある、理のある所には必ず事がある、事と理とは二にして一體である、然るに唯一方にのみ執して一方を知らない故に迷となるのである。

ところが又理に契ふも亦悟にあらずとある、と云ふのは無差別の理の一方面に

のみに契ふても事が缺けて居るゆゑ、眞の悟りではない。理は無差別にして事は差別の方である、一方に片落するから眞の悟りにはならぬ、眞の悟りは差別にも墮ちず無差別にも墮ちざる中的不犯の端的であるのである。この事と理とが元來二つ竝んで居るわけでなく、たゞ説明の順序として平等の當體を理とし、差別の當相を事といふたのである、中的不犯の端的は何れにも片寄つて居らぬから、一方から見れば事となり、一方から見れば理となるのである。事相と理性とは二にして不二であることを知らねばならぬ、然るに理にばかり契ふても事が缺ける時は亦是れ悟りではない、眞個の悟りと云ふのは、迷ひは勿論のこと悟りをも超越したのが眞の悟りであります、唯だ一方のみの此の事に執したり、又は唯だ理の一方のみに契ふたのでは片偏頗である、片落したものは眞の悟りとはいへない、眞の悟りは事理圓融にして其の圓融にもあづからざる所にあるのだ。事と理とは氷の解けたるが如く圓融せねばならぬ、此のコツプに付きましても形相は事にして、水を飲む働きの所に自ら理が具はつて居る。斯の如く事理圓融にして其の圓融にも墮ちざる所を合點せねばならぬ。謂ゆる響きである。その響を聞いて取らねばならぬ、圓融の道理

は文字を以てあらはして説明も出來るけれども、其の圓融にもあづからざる所は文字も説明も屆かぬ、謂ゆる中的不犯のところである、中的不犯とはまん中の黑星の端的は書くことも説く事も出來ぬ、中道實相と云ふも實は假名である、中道と云へば何か眞中に固まり物でもあるやうに思ふから、寧ろ中的不犯と云ふ方が善いと思ふ、中的不犯の處は坐禪して自ら悟るより外はない、冷暖自知の所である。

門々一切境、回互不回互、回而更相涉、不爾依位住。

【讀方】門々一切の境、回互と不回互と回して更に相涉る、爾ざれば位に依つて住す。

門門一切の境、この門々と云ふことは、門は一つではない、六つの門があるから門門と云ふたのだ。所謂六根門のことである。六根とは眼、耳、鼻、舌、身、意である。境とは六境である、六境は六塵の境を云ふ、六塵とは色、聲、香、味、觸、法のことである、六塵の境を始めとし、其外に澤山の境があるから一切の境と云ふたのだ。六根と六塵と相對し涉入して作用を起すのである、其六根に對するには六塵の境がある、それだから門

門一切の境と云ふた。眼は見る方、色は見られる方であり、耳は聞く方、聲は聞かれる方である、六根と六塵とが互に相回互して居るのである。回互と不回互と、世の中の事は皆回互で出來て居る、今話す衲と聞く處の諸君とが互に回互して居るのである、此のコップと水差とも互に回互して居る、又家屋の上に於いても石材も入るし木材も入る、種々なる材料が相集まり互に回互して以つて家屋が出來て居る。家屋は人に依り人は家屋に依る、是れ乃ち回互して居るではないか。世の中のことは皆是れ回互の道理である。回互と云ふのは互ひに持ちつ持たれつして相ひ扶け合つて行くことであります。資本家と勞働者とも互ひに回互して行かねばならぬ。備主と使用人と、地主と小作人とも相ひ互ひ回互して行かねばならぬのである。此の親切なる回互の道理が互に能く通ずれば彼の世間の勞働問題とか小作爭議といつたやうな騷ぎは起るまいと思ふ、日清日露の戰爭の如きも上御一人の御心と下萬民の心とが互に回互し一致したから彼の如き好結果を得たのである。而してまた、この回互の道理の上には不回互の道理がある、不回互の道理の上には回互の道理がある、不回互とは各々獨立の面目を具へたることである、今こゝに話す人は話す人で、他の口を借らずして話して居る。聞く人は聞く人にして他の耳を借りて聞いては居らぬ、皆それぞれ獨立の面目を具へて居るではないか、家庭の上に於ても子たるものはいつまでも親の脛をかぢつて寄り掛つて居つてはならぬ、國防の上に於いてもさうだ海軍と陸軍とは互ひに回互せねばならぬけれども、其海陸軍各〻獨立の面目を具へて他に讓らざるこの不回互の道理もなければならぬ。

回して更に相涉る、回して更に相涉ると云ふことは、回互の道理を伸べたのである。人間の身體の上に於いても目もなければならぬ、また鼻もなければならぬ、手も必要なれば足もまた必要である、皆是れ相ひ互に回互することを回して更に相ひ涉ると云ふのだ。爾らざれば位に依つて住す、これはまた不回互の方を云ふのである。目は目の法位に住し、鼻は鼻の法位に住し、手は手の法位に住し足は足の法位に住して獨立して居る。

法華經にも「法住法位世間相常住」とある、山は山の位に住し、海は海の位に住し、水差しは水差し、コップはコップであつて各々法位に住して居る、世間の相は常に各各法位に住して居るではないか、是れ卽ち不回互の面目である。

色元殊質像、聲本異樂苦。

【讀方】色元質像を殊にし、聲本樂苦を異にす。

色元質像を殊にし、色と云ふのにも二通りある、一は形色と云ふて長短方圓の形の方を云ひ。一つは顯色と云ふて青黄赤白の色の方を云ふた。形色の方は長短方圓の形の方であり、顯色の方は青黄赤白の色の方である、質と云ふのは性質のことである、像は影像にして形のことである、人間の上にもいろいろな性質がある、同じ兄弟でも其の性質の上に於いては違ふことがある、唯だ人間のみにあらず、石にも樹にもいろ〳〵の性質がある、松には古今の色なく、竹には上下の節がある、性質形像各々異りがある、色の上斗りではない、聲本樂苦を異にす、聲の上にも苦聲もあれば樂聲もある、溪河の聲もあれば松風の音もある、鳥の聲にも色々ある、今は六塵の中の聲色の二つを擧げられたので、香も味も、觸も、法もみな此の中に自ら含んで居る。香の上にも味の上にも色々なる種類があると思ふ。

暗合上中言、明分清濁句。

【讀方】暗は上中の言に合ひ、明は清濁の句を分つ。

暗は上中の言に合ひ、明と暗との文字は前の「靈源明に皎潔たり、支派暗に流注す」とある所にもあつた。暗はくらくして能所彼此の立たぬことである。平等にして差別のなき方である、本文には上中とあるけれども、上下と言ふのと同じ事である、今上下を合すると云ふのは上と下とが合するのである、上下其の心を一にするのが、上中の言に合するとは云ふのである。上中の言に合ふは平等觀の方から云ふた、言句の二字を以つて上の句と下の句とに分けて用ひたのだ。明は清濁の句を分つと云ふ方は差別觀の方から云ふたのである。明るい方は物の能くはつきりと分かる方、清濁と云ふのは水の濁り又澄むことである。世の中は清と濁との兩方面である、佛は清淨にして澄んで居る、衆生は不淨にして濁つて居る方である、煩惱もあり、菩提もある、清もあり濁もある、是れ差別の方である、いつも申す通り佛敎の說は差別中の無差別にして、無差別中の差別である、

二にして一である、一にして二である。吾人の上から申せば人間と云へば平等である。眼横鼻直皮肉骨髓の上へから云へば差別であるが、皮肉骨髓の外に人間なく人間の外に皮肉骨髓はない、是れ卽ち無差別中の差別である、差別中の無差別である、上中の言に合する方は無差別の方である、清濁の句を明かすのは差別の方である、吾佛敎を信ずる人々には惡平等惡差別の恐るべき思想は起るはづはないと信じます。

四大性自復、如子得其母。

【讀方】四大の性自ら復す、子の其の母を得るが如し。

四大の性自ら復すと云ふ、四大と云ふはみなさん御承知の通り地水火風の四つのことであります。大と云ふのは、この四大は周遍法界の物であります、吾人の身體も世界も四大の所成であります。ゆゑに大と云ふたのであります、四大の性とは如何、火は熱するのが火の性である、水は濕ふのが水の性である、堅固なるものは地の性である、又動搖するのが風の性である。其の性が自ら復すと云ふのは、四大の性が

夫々元の處へ復するので、本源に復するのである。卽ち佛性の本源に復するのである。佛性を離れて別に四大はない、四大の性と云ふても、その性は皆是れ無性の性である、火は熱いのが性であるけれども終ひには灰となる、水は濕ふのが性であるけれども濕ふに濕ふと云ふ自性はない、詰り四大ともに皆自性はない、緣起の法門には自性がない、因緣合成の物には自性はない、無性の性である、其の無性が卽ち佛性の性である、其の佛性なるものがただ因緣の力に依つて森羅萬象と顯はれて居る、此の無性と云ふものは火も燒くことは出來ぬ、水も溺らすことは出來ぬ、這箇の無性を悟るのが佛法の一大事因緣である、この端的は實地修行の力でないと悟ることは出來ないのである。

子の其母を得るが如しとある。例へば子と云ふものは母から生まれたものである、四人の子は母から生れる、いま母と云ふのは佛性のことである。全體、母は生み出すものである、母は本で子は末である、四大は子であつて佛性は母である、復すると は本の母の處に歸ることである、佛性に歸入しないものはない。御經にも佛性は無性を性とするとある、天地間の物は皆佛性の變現である。

火熱風動搖、水濕地堅固、眼色耳音聲、鼻香舌鹹酢。

【讀方】火は熱し風は動搖、水は濕ひ地は堅固、眼は色耳は音聲、鼻は香、舌は鹹酢。

火は熱するのが火の性である、風は動搖するのが風の性である、水は濕ふのが水の性である、地は堅固なのが地の性である、四大ともに性はあるけれども要するに無性の性である、眼は色耳は音聲、鼻は香舌は鹹酢維。摩經に「無住の本より一切の法を立す」とある、洞山大師は「不可得の裏に只麽に得たり」と云はれてある。無住の本より生じたる一切の法であるから皆無住である、不可得と云ふても文字の通り「得べからず」と云ふことではない、山は山にして不可得である、海は海にして不可得である、一切の諸法はありのまゝ不可得の面目である、因緣所生の法はみな是れ不可得の姿である、物をなくして了つて不可得と云ふのではない萬有界のありのままの姿がそつくり不可得の面目であることを知らねばならぬ。是れ卽ち無性の性の道理である。

而於一々法、依根葉分布。

【讀方】而も一々の法に於いて根に依つて葉分布す。

一々の法に於いて根によつて葉分布すとある、一々の法と云ふのは、六根と六塵と相對の法である、眼は色を見る、耳は音聲を聞く、鼻は香をかぐ、舌は鹹酢の味を知るのである。六根は木の根の如く六塵は木の葉の如く根に依つて葉が分布するのである。

本末須歸宗、尊卑用其語。

【讀方】本末須く宗に歸すべし、尊卑其の語を用ゆ。

本末須く宗に歸すべしといふのは、木の上からいふ時は、六根は木の根にして本である、六塵は木の葉にして末である。須らく宗に歸すべしとある、其の宗が大切である。宗と云ふのは尊ぶ所、大本家の處を宗と云ふのだ、今は初にある竺土大仙の心が卽ち宗である、六根の根も、六塵の葉も、みなこの宗に歸するのである。名を換えて

言へば卽ち佛性である、この佛性に歸入しない物はあるまい、今は本末共に佛祖密附の是の大仙の心に歸せざる物はあるまい。尊卑其語を用ゆとは、尊は上諸佛にして、卑は下衆生である。人の上に於ても貴き人もあれば卑しき人もある。貴族には貴族の言葉があり車夫には車夫の言葉があつて其の語を用ゐて居る、尊卑ありと雖も尊卑共に宗に歸すると云ふ事は免れまい。

當明中有暗、勿以暗相遇。當暗中有明、勿以明相覩。明暗各相對、比如前後步。

【讀方】明中に當つて暗有り、暗相を以て遇ふこと勿れ、暗中に當つて明あり、明相を以つて覩ること勿れ、明暗各相對して比するに前後の步の如し。

明中に當つて暗あり、暗相を以て遇ふことなかれ、此の一節は大切なる所である、吹唱の方では「當に明中に暗あるべし、暗相を以て遇ふこと勿れ」と云ふ點になつて居る。洞家の宗乘は宛轉であるから「當に明中に暗あるべし」の方が却つて宗旨に親しいと思ふ、唯だ文相だけの上から見ると明中に當つて暗ありと云ふことは、箱根のトンチルか碓氷峠のトンチルでも通るやうに思ふ人もあるかも知れぬが、決してそんな道理ではない。明中暗あり。暗中明ありの道理に能く能く參じて見るがよい。西有禪師はいつも誠に輕快にして速座に面白いことを云はれる人であつた。信州に巡錫の際隨伴して行つたとき、汽車が輕井澤に着くと汽車から下りて小水の用をなして汽車の席に着くと「トンチルを、どんと眠つて二十六降りて小べん、身は輕井澤」と云はれた、また或時、他へ授戒に行かれた、昔は大名や寺院は籠に乘つて步いたものである、今では籠を用ひない故保存してある、其の古い籠を以て迎ひに出られた、古い籠だから途中にて底が拔けた、迎ひの者が皆心配をしますと、西有禪師は卽席に「古籠の底の拔けると死ぬるのは處きらはず、時をえらばず」といつて笑つて居られた、心配した迎ひの人達もそれですつかり安心したことがある。いま明中に暗あり暗中に明ある道理はトンチルをどんと眠つて二十六と云ふやうなそんなことではない。また文字の通りに考へますと、梟鳥の如くに思ふかも知れぬ、彼の梟鳥は晝間は暗くて見えぬ、夜に入ると明るくてよく見えるなぞと云つたやうな講釋をして居る人もあるが、それは間違ひであるとおもふ。今少しく詳しく申せば、

明と云ふは前々から幾度も述べて居るやうに明は差別界にして、暗は無差別界のことである。つまり差別の中に無差別があり、無差別の中に差別があるのであつて、差別とも無差別とも分けることは出來ないのである、佛法では佛性は平等にして其の平等なる無差別の佛性が緣起して差別となつたのであるから、差別のないが直に無差別である、衲が大學に學長をして居つた頃、五位の道理を講話致しました、その時、學生が差別中に無差別あり、無差別中に差別がある、それでは試驗に困るから、差別とか無差別とかはつきり分けてもらひたいと云ふた笑話がある。分けて見た處が法の方は分けられるものではない、今石頭大師は明暗の二字を以て明中に暗あり暗中に明あり、一つでもなく二つでもない、明暗雙々を說いて明暗雙々に與からざる道理を響かして居る。明中に暗あり、暗中に明ある道理は一應の說明は出來るけれども、中的不犯の處は說明せられたものではない。たゞ其の響を聞いてとるより外はない、此の中的不犯の處は自知自得である、佛も止々不須說我法妙難思議といはれてある。

明暗各相對して明と暗と二つとも相對して居ては活動は出來ぬ、比するに前後の歩みの如しである、前歩が後歩となり後歩が前歩となりて、前歩とも後歩とも定められぬ、明中に暗あり暗中に明あるがゆゑに明とも暗とも定められぬ。道理は判つて居つても落ち着きが惡い。下手に作つた起き上り小法師のやうに尻の坐りが惡い、坐りを好くするには修行が必要である、禪は修行が肝要である。隱元禪師は二十五歳の時修行に發足せられた、其發足の時に述べられた言葉に「我れ歳二十五、氣慨佛祖を呑む、此事を透得せずんば、來時の道を踏まず」と云はれたとある。何でも斯の如くの氣慨がなければ修行は成就するものでない。氣慨佛祖を呑むの志氣がなければならぬ、唯是れ禪の修行のみではない、何事でも此の氣慨がなければならぬと思ふ。（昭和二年九月二十三日三菱本社第二會議室に於て）

萬物自有功、當言用及處。

【讀方】萬物自から功有り、當に用と處とを言ふべし。

吹唱の方を見ると「萬物自づから功有り、當に用のきわまる處と言ふべし」とある。けれども、今はこの讀み方で話します、萬物自から功ありと云ふのは、天地間にある

とあらゆる萬物は一つとして其の功用の無いものはない、こゝにテーブルがあります、此のテーブルは色々の物を載せるのが卽ちテーブルの功用であります。この水注しは水を入れるといふのが卽ち水注しの功用であります。コップにはコップの功用があります、松には松の功用があり、竹には竹の功用があります。男は耕すのを功となし、女は織る事を功となす、耕すの用は晨昏を養ひ、織の用は寒暑を防ぐのである。天地間の萬物には皆是れ其の功用が自然と具はつて居る、今日までは彼の鍼力の切り屑ほど役に立たぬものはないと云ふて居ります、それゆゑに役に立たぬ人間のことを鍼力の屑みたやうだと云ひましたが、今日に於ては其の鍼力の屑を銅の出る處の澤に置きまするとと流れてくる銅が其鍼力の屑に一杯着くと云ひます。故に銅山に於いては其鍼力の屑が大切であると云はねばならぬ、何んでも其の用ゆる處へ用ゆれば捨つる物は一つもないのである、廢物利用して、役に立つ處へ用ゆればそのまゝ役に立ちます。是の本文は功用と云ふ二字を割つて使ふたのである、萬物みな是れ功用があります、柱は柱の居場所に在つて柱の功用を現はして居る、鴨居は鴨居の居場所に在つて鴨居の働きを現はして居る。萬物皆其の居場

所居場所に居つてその働きを現はして居るのである。

事存函蓋合、理應箭鋒拄。

【讀方】事存すれば函蓋合し、理應ずれば箭鋒拄ふ。

この處は事理圓融の道理を說いて居る、事存すれば函蓋合す。事の功の存する處には必らず理の用が應ずる。事を離れて理はないと同時に功を離れては用はない功用事理は二にして不二であります。事は相であつて差別であり、理は性であつて無差別である。函蓋合すると云ふことは、函と云ふのは箱のことで、蓋と云ふのはフタのことである、彼の重箱の蓋と箱とが隙間なく能く合するやうに、理を離れては事はない、事を離れては理はない、この事理圓融の道理は函蓋合するが如くといふのである、理は體にして事は用である、因と果との上から言へば因は理であつて果は事である、前にも云ふ通り理は物の本體にして無差別の方である、事と云ふのは事相にして差別の方である、體と用との關係から云へば、體は本體にして用は現象である、此の體用の道理は體中に用があり、用中に體があり、體と用の二は離したく

も離すことは出來ぬ。因と果との道理もまた同じである。因中に果あり、果中に因あり、二にして不二である。理應ずれば箭鋒拄ふ。理と事とが相ひ應ずることは丁度矢尻りと矢尻りとが合致したるが如くである。この箭鋒拄ふと云ふことは故事がある、それは昔支那に飛衞と云ふ弓の先生があつた、其の弟子に紀昌と云ふ是れ亦名人であります、其の弟子が師匠を殺して天下一の弓の名人とならうと思つて、途中で互に相ひ逢ふて弓を射ると雙方が名人同士であるから箭鋒相ひ拄ふたと云ふことがある。理の應ずるところは事と相ひ拄ふ事の存するところは理と相ひ拄ふのである。

承言須會宗、勿自立規矩。

【讀方】言を承けては須らく宗を會すべし、自から規矩を立すること勿れ。

言を承けては須く宗を會すべし、此の宗と云ふのは、口も宣ぶること能はず、心も緣ずること能はざる所である。三祖大師は「十方の智者皆此の宗に入る」と云はれた、何事でも言を承けては其の宗を會得せねばならぬ。況んや佛法をやである。佛意は言葉には用事はない。意圓言偏と云ふことがある、意は圓にして言葉と云ふものは偏頗である、有と無と一處には言はれない。有と言へば無が缺ける無と言へば有が缺ける。言葉はみな偏頗である。或僧が雲門和尚に向つて、「如何なるか是れ佛」と問ふた、雲門答へて云く、「乾屎橛」と、乾はカワクこと、橛はヘラのことで、大便をして紙の代りに橛で拭ひ、其の橛に付ひたる糞の乾きたるものを乾屎橛と云ふのだ、佛は本來清淨なる物であるのに雲門は乾屎橛と云ふた、もしこの言葉に着いて居たならば千萬年經つも到底佛は分るまい。宗意を合點して見れば雲門は活きた眞佛を晒け出して見せて居る雲門の慈悲がこの一句の中に現れて居る。一體佛と申しまする方は三十二相八十種好の立派な御相好を具へたる御姿を佛と申すのである、雲門の乾屎橛の言葉には此三十二相八十種好なぞの佛臭い處を離れた眞佛を響かして居るかも知れぬ。言を承けては須らく宗を會せねばならぬ。僧あり、洞山の守初禪師にまた「如何が是れ佛」と問ふた。洞山「麻三斤」と答ふ。麻三斤の言葉に着かずして洞山の宗を會せねばならぬ。麻三斤と云ふ、その言葉の響きを聞き取らねばならぬ。納はよく雲水を叱るときに口ぐせのやうに、「去つてしまへ」といふそうであるが。自分

のくいせはわからぬものである、或る時雲水を例に依て叱り付けて「去つてしまへ」と一喝した、その内には誰れかあやまりに來るだらうと實は心祕かに待つて居つたが、其の雲水の姿が見えぬから典座を呼んで聞いて見ると「出て行けと云はれたから行くと云ふて今朝出て行きました」と云ふた、衲が「出て行け」と云ふ言葉の中には響きがある、其の言葉の中には心を入れ替へて勇猛精進せよと云ふ激勵の響きがあるけれども、其宗を會せないのは殘念なことである、或る親が道樂息子を叱り付けて今日限り勘當するから出て行けと云ふた、息子は支度をして玄關から出て行かうとすると「其處から出るではない」、裏口より出て行かうとすると「其處から出るではない」と云ふた話がある、詰り口には出て行けと叱り付けても親の心の底は心を直せと云ふ、其の響きを聽取らねばならぬ、此參同契も亦是の如くである、石頭大師が文字を以つて書き現はし、言葉を以て伸べて居られるけれども文字や言葉には用事はない、たゞ是れ宗を會せねばならぬ、古人も「從來の妙唱は舌に與からず」と云はれた、ずつと向上の處に到ると、文字や言葉を以つて言ひ盡せるものではない、山椒はヒリヒリする、其のヒリヒリする處の味は文字を以ても言葉を以ても伸べ

られまい、其の味を嘗めた人同士なれば山椒はヒリヒリすると云へば能く分ることである。

香嚴和尚と云ふ人は千經萬論に達した人であるけれども、潙山の處に行つて「父母未生以前に向つて一句を道へ」と問はれたが答へられなかつたとある、たゞ學問ばかりでは畫餅の如くである、香嚴はそれより後專一に坐禪修行せられて、掃除の折柄竹に石がぶつかる音を聽いて悟つた人である。昨日日本倶樂部の眼藏會でも話した如く、德山和尚は大變金剛經に長じた學者であつたけれども、餅賣りの婆あさんに過去心で點心するか、現在心で點心するか、未來心で點心するかと問はれて答が出來なかつたとある。それから後金剛經を燒き棄てゝ專一に修行せられ、終に龍潭の處に到つて悟られた、專心修行の下に於て這の宗を會せねばならぬ。自づから規矩を立すること勿れとある、自分で規則を立てゝ、その規則の爲に縛られる人が澤山あると思ふ、天台宗では藏通別圓の四敎を立て華嚴宗では小始終頓圓の五敎を立てゝ釋尊御一代の說法を此の四敎に當てはめたり、または五敎に配當したりして居る、なにも其の四敎、五敎が惡いといふのではないけれども何れもその規

矩と立てて、そうして其の規則に縛られてしまうては佛の本意を會することは出來ぬ、隨分佛教學者の中にも宗を會せずして唯だ規則に縛ばられて居る人がある。講釋佛教は靴を隔てて痒を搔くやうなもので、痒いところに手が屆かない、規矩も大切ではあるけれども縛られて居ては本當の働きが出來ぬ。達磨の佛法は獻立佛法ではない、直に其味を喫せしめるのである。心地を開明し本分に安住するのが達磨の本旨である。

觸目不會道、運足焉知路、進步非近遠、迷隔山河固。

【讀方】觸目道を會せずんば、足を運ぶも焉んぞ路を知らん、歩を進むれば近遠に非ず。迷ふて山河の固を隔つ。

觸目道を會せずんば、目に觸るゝものは皆是れ道である、道は世界一ぱいになつて居る、觸目菩提と云ふことがある、菩提と云ふは道のことである、世界の人はみな此の道の上に寢たり起きたりして居る、しかし、多くは其の道たることを知らずに過して居る。魚と云ふものは水の中に居りながら水たることを知らぬ、道は脚下に

あるけれども我見私欲から割り出すから遠く隔つことになる。道の上へには無理はないと思ふ。處が今日は資本家と勞働者との協調の出來ないのはみな是れ相方に無理があるからだと思ひます。地方に於ける小作爭議などでも道に依りさへすれば爭議は起らないと思ひます。前にも申しましたるが如く道に依れば道の上には無理はないからである。お互ひに道に依りたいものである、孔子樣は「七十にして心の欲する處に從つて矩を踰えず」と云はれて居る、是れ乃ち日用の上のすることなす事が道に契ふからである。又是れ觸目菩提を會した人である。道元禪師は「佛道は人々の脚跟下なり」と示めされた。道は是れ遠方ではない、脚下を照顧せよ、人々脚下黃金の地ではないか、千里萬里もまた是れ一歩の中にある、一歩を誤まれば當面に差過するのであるから、一歩が大切である。觸目する處が卽ち道である。脚下に氣がつかずして、千里萬里を行くのは卽ち是れ無駄歩きである、私情私欲の上へから割り出すものは、すべて事爲す事が道と十萬八千ほど遠く隔たるのである。是れ卽ち足を運ぶも焉んぞ路を知らんといふ人と申さねばならぬ。歩みを進むれば近遠に非らず、吾人は常に道の上へに寢たり起きたりして居るではないか。茶裏飯裏別

所に向かはず、茶を飲む上に於いても飯を喫する上に於いても皆是れ道の上の事にして別の處ではない。近いの遠いのと云ふところではない。遠近を離れたる端的である、迷ふて山河の固を隔つ、と云ふのは道の中にありながら迷へば十萬八千里の隔りとなる、固と云ふのは山河の固を隔て道とは遠うして遠うくなるのである。各自が毎日踏んで居る脚下に注意するがよい。

謹白參玄人。光陰莫虛度。

【讀方】謹んで參玄の人に白す、光陰虛しく度ること莫れ。

謹んで參玄の人に白す、參玄の人と云ふのは玄々微妙の道を參究する人である道に參ずる人は皆是れ參玄の人である、後世恐るべしで、謹んで參玄の人に申すと尊んでの語である。光陰虛しく度ること莫れ、光陰程大切なるものはない、修行の人は光陰を惜まねばならぬ、光陰を惜むの人は道を惜む人である、昔から「光陰矢の如し」と云ふ言葉がある。御經の中にある話であるが、城の中央に人あり、其の人が、城の四方に能く弓を射る四人の者がありて一時に矢を放つた、其放ちたる矢を地に落

さず四本の矢を悉く中央の一人が採り拾ふたと云ふ話しがある、此の四本の矢を地に落さずに拾ふ人は隨分走るに疾い人であるけれども、光陰の過ぎ行くことは、それよりもまだ疾いと云ふ譬へである。御互若い若いと思つて居る中に知らず知らずの間に年齒をとるのである。雪竇禪師の頌がある、誠に好い頌だと思ふ。

三分光陰二早過。靈臺一點不揩磨。貪生逐日區區去。喚不回頭爭奈何。

佛敎には九旬安居と云ふことがある。禁足して修行を專一にするのである、今九十日の安居も三分の二は早く過ぐで、光陰の實に移り易きことである、また九十年生きる人なれば六十になれば三分の光陰は二早く過きて居る。衲は本年七十であるから二分どころではない、二分以上も已に過ぎて居る、實に恥しきことである。靈臺と云ふは心のことで、詰り心の上の修行は少しも出來ずして唯年を重ねたるのみである、「人身得ること難し」で、幸に長生きをしても一向道を聞かうともせない人が世間には少くない、光陰を空しく過しても一言一句でも善い道のことを聞いたならば恥しき事を知る人となるのである、道のことを聞かない人はつまらぬ人だ、憐れな人といふべきである、論語には「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」とある。光

陰を空しく過ぐして徒に長生きした人よりも道を守つた短命の人の方が長く尊ばれることである。生を貪り日を逐ふて區々として去るで、多くは皆是れ是の如くである、たゞ貪名愛利のために日を逐ふて區々として去るのみ、喚べとも頭を回さゞるを如何にせん、早く心地の上への修行をするがいい、無駄に費す時間を廻らして佛道の話を聞けと折角喚び叫んでも見向きもせぬ志のなき人ばかりであると大に歎げかれての垂示である。

道元禪師の偈に

往還六道無停止。一句正法聽尤難。汝等大衆休瞎睡。光陰百歳轉流丸。

といふがある。六道と云ふのは、地獄と餓鬼と畜生と修羅と人間と天上との六であるが、詰り、六道は迷の巷である、毎日多くは是れ六道の迷ひの巷に往還して居りはせぬか、丁度尺とり蟲が桶の縁を尺を取つて廻り歩くやうなものだ、一句の正法聽くこと尤も難し、實にそうである、一句でも正法を聽くがよい、聞く氣になつただけでもよい、卽心卽佛の一句の下に大梅和尚は徹底せられたではないか、眞實聽く氣にならねば折角聽いても徹底することは難かしい。汝等大衆瞎睡することを休めよ、是れは座下の大衆に向つて警告せられたのである、今日と云ふ今日は大切なる今日であるから、睡つて居つては駄目だとの三十棒である。光陰百歳流丸を轉ずで、百歳の光陰は恰も丸い玉を轉ずるが如くで、坂の上より丸い玉を轉ずるに似て、光陰は留むれども止まらず、西洋でも時間は金だと云つて居る、光陰を惜しむ人は、詰り道を惜しむ人である、勸學の文章にも「今日學ばずして明日ありと云ふこと勿れ」とある、光陰を虛しく度らざる事は、唯是れ坐禪のみだと思ひます。坐禪は六度萬行體中に圓かなりともあり、また三千威儀八萬の細行等が圓滿具足したものが坐禪であります。正傳し來る所の坐禪の端的は卽ち是れ一寸坐れば一寸の佛の現成である。ゆゑに、光陰虛しく度らざる所の人であります。辨道話にも「若し人一時なりとも三業に佛印を標し三昧に端坐する時遍法界皆佛印となり、盡虛空悉く悟りとなる故に諸佛如來をして本地の法樂を增し覺道の莊嚴を新にし三途六道の群類をして皆共に一時に身心淨明にして大解脫を得せしむ」とあるではないか。今日は參同契講了に就きまして一偈を左に伸べます。（昭和二年十二月七日三菱本社會議室に於て）

暗中有明明中暗。回互法門何得侵。祖意元來文字外。東西密付大仙心。

參同契講話 終

昭和三年十一月十三日印刷
昭和三年十一月十六日發行
（定價六拾錢）

編輯兼發行者　東京市小石川區原町六番地　高島米峰
印刷者　東京市本郷區駒込林町一七二　柴山則常
印刷所　東京市本郷區駒込林町一七二　合資會社杏林舍

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六
振替東京一五六八六
電話小石川一二八
丙午出版社

249
213

秋野孝道老師著

禪宗綱要

定價二圓五十錢
郵税金八錢

不立文字の禪宗却つて文字を立つること最も多く禪に關する著作眞に汗牛充棟と謂ふべししかも多くはこれ片々たる語錄話頭の編輯にして未だ禪の組織的研究の發表せられざるを遺憾とす本書はまづ禪の歷史的研究に獨創の見を洩し更にその敎理の科學的研究に於て先人未到の境地を開拓し最後に禪戒一如を道破し禪を以て活社會に於ける實生活上の一大威力たらしめむとす正にこれ敎外別傳の眞諦たり

秋野孝道老師述
赤星陸治氏筆受

碧巖集講話

定價金七圓
送料金二十四錢

碧巖集は禪門第一の書にして苟も禪に參じ禪を談ぜむとするものゝ必ず透過せざるべからざる最初の關門にして又實に最後の關門なりこれを以て此書の註疏講錄古來二十有餘種を下らず各々獨自の天地を開拓して個性の顯揚頗る鮮なるものありと雖もしかもなほ多少の出入得失ありて普く一切に施して平等に利益せしむるに足る底のものあるを知らずこれこれを憾みとする有志胥謀り現代敎禪二門の第一人者秋野孝道老師に懇請してこの講話を公刊することを得たる所以なりこゝに始めて久參と新進とを問はず雪竇圜悟の老婆心切を味ひつゝ祖師西來の意に徹することを頗る容易なるに至れり以て慶すべし

秋野孝道老師著

從容錄講話

上卷 定價五圓 送料十八錢
下卷 定價四圓 送料十八錢

從容錄は碧巖集と共に禪門の二大聖典にして彼は臨濟に貴ばれ此は曹洞に重ぜらる殊に文學的色彩の濃厚なると頌古の風格清高なるとは正に從容錄の特色たりたゝ憾むらくは章句奇古にして含蓄多く久參底と雖も讀み難く解し難きことを然るに今行解相應禪林第一の棟梁を以て推さるゝ秋野老師がその蘊蓄を傾けて百則を徹講すまづ『垂示』と『本則』と『頌』とを和譯して傍訓を施し以てその讀方を敎へ次いで講話に入り字解義解を盡して章意を明にす

新井石禪老師著

信心銘講話

定價金一圓五十錢
郵税金八錢

不立文字の禪門に始めて文字を公示せられしは三祖僧燦大師の信心銘なり四言一百四十六句の韻文簡古精練恰も眞珠の顆々光明を放つが如く佛法の根源を極め宗乘の極致を盡し大藏經八千餘卷の妙旨も此中に收め公案一千七百則も源を此處に發す眞にこれ禪門第一の書而して今禪界獨往の大德新井禪師これを講說して微に入り細に涉り恰も錦上に花を敷くの偉觀をなす法境無限敢て人の來り遊ぶに委す

文學博士 村上專精先生著

大乘起信論講話

定價金一圓七十錢
郵税金十錢

大乘起信論は佛敎哲學の精華にして單に一部の哲學書としてこれを見るも古今東西を通じて稀觀の好著たるのみならずその敍述の方法に於てはシオペンハワーをして「最高人知の產出する所」と讚嘆せしめたる夫のウパニシャッドに比して更に一頭地を拔ける者あり今村上博士深邃の學識を傾けてその內包の意義を剖判し且つ所々論題を設けて重要の敎理を闡明す古來此論を釋して此くの如く平明に幽玄を語り得たるものあることなし